

# 紀 要

## 第 3 号

---

### 目 次

序

1. お米を作りだしたころ……………(浜崎悟司・細川修平・奈良俊哉)
  2. 滋賀県下の方形周溝墓の“供献土器”について……………(吉田秀則)
  3. 手焙形土器雑想  
—葛籠尾崎湖底遺跡出土品に寄せて—……………(小竹森直子)
  4. 三つの古墳の墳形と規模  
—近江における古墳時代首長の動向および特質メモ作成のために—  
……………(用田政晴)
  5. 野洲川下流域の古代豪族の動向  
—近江古代豪族ノート4—……………(大橋信弥)
  6. 満願寺廃寺出土瓦の産地……………(三辻利一・北村大輔・北村圭弘)
  7. 信楽と丹波……………(松澤修)
  8. 人形茶碗・人形手茶碗  
—考古学的視座からのアプローチ—……………(稲垣正宏)
- 

1990. 3

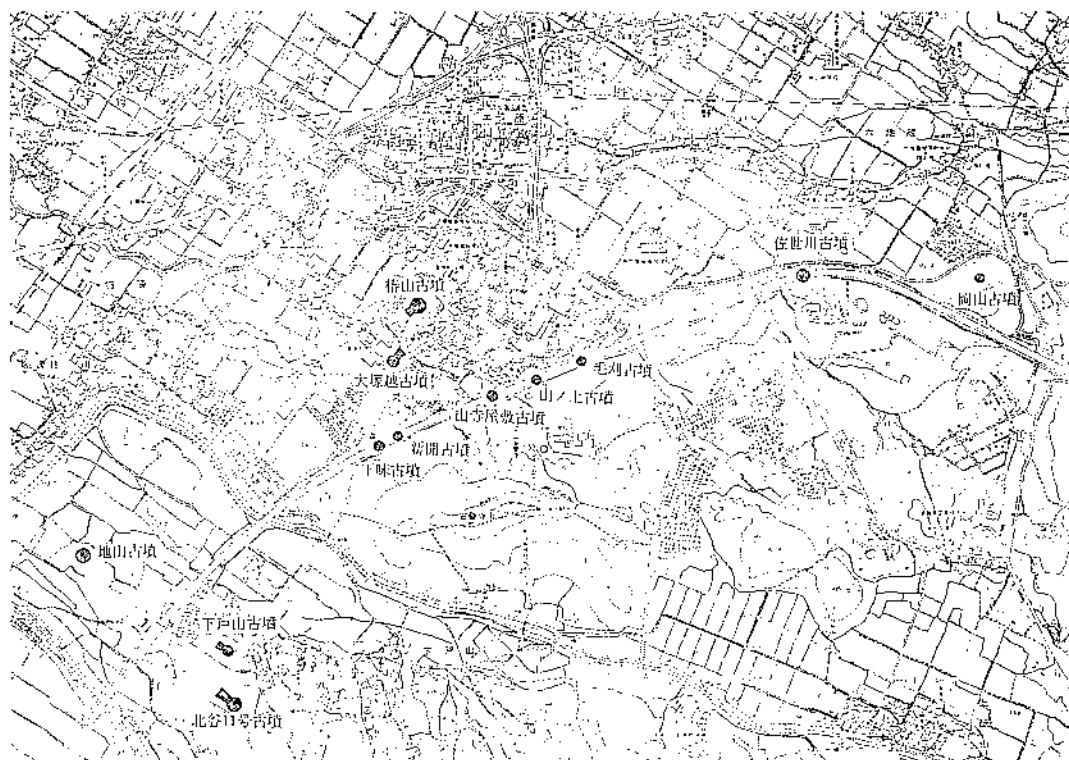
財団法人 滋賀県文化財保護協会

## 5. 野洲川下流域の古代豪族の動向 —近江古代豪族ノート4—

大橋 信 弥

### 1. はじめに

琵琶湖の東、鈴鹿山系に源を発する野洲川は、甲賀郡の古琵琶湖層を貫流し、三上山の南麓から野洲郡と栗太郡の郡界を縫って、湖に流入する大河川で、その下流域には、近江最大の野洲平野を形成している。そして、かかる環境を背景に、近江における中心的な政治勢力が、弥生時代中期以降成長したことは、その独特な土器様相、或いは三上山西麓の大岩山で発見された、総数24口にのぼる銅鐸の存在からも、うかがうことができる<sup>(1)</sup>。また文献の上からも、開化皇子日子坐王と、御上祝が奉祭する天御影神の女息長水依比売との間に所生した、水穂真若王を祖とする、近淡海安国造=安直の存在は、野洲川下流域、特にその右岸の野洲地域における政治勢力の大きさを物語るものとして、従来より注目されるところであった<sup>(2)</sup>。しかしながら、野洲川下流域の古墳と古墳群のあり方など、地域的な動向を更めて洗い直してみると、従来、あまり注目されていなかった、野洲川左岸の栗太地域の重要性をはじめ、いくつかの点で旧説への疑問も生じてき



第1図 野洲川左岸の首長墓

た。そこで小論では、主として野洲川左岸の勢力を中心に、野洲川下流域の古代豪族の動向を、地域史的な立場から検討を加えてみた。

## 2. 野洲川左岸地域の古墳と古墳群

野洲川左岸地域とは、古代野洲川の主要な分流境川を北限とし、瀬田川を南限とする旧栗太郡の郡域にほぼ該当する。旧栗太郡は、草津川、狼川によって、さらに三つの小地域に区分されるが、<sup>(3)</sup> そのうち、前期から後期まで首長墓の系譜をたどれるのは、北端の栗東地域のみであり、栗太郡の政治的な重心が、この地域にあったことを示している。

まず、出現期の古墳としては、北端の栗東地域に、栗東町六地藏の岡山古墳<sup>(4)</sup> 出庭の亀塚古墳<sup>(5)</sup> の存在が知られるほか、南端の瀬田地域に、大津市瀬田織部古墳<sup>(6)</sup> 中間の草津地域に、草津市追分の追分古墳<sup>(7)</sup> と、ほぼ均質的なあり方を示している。ここでは、栗東地域の二古墳について、若干の説明を加えておきたい。

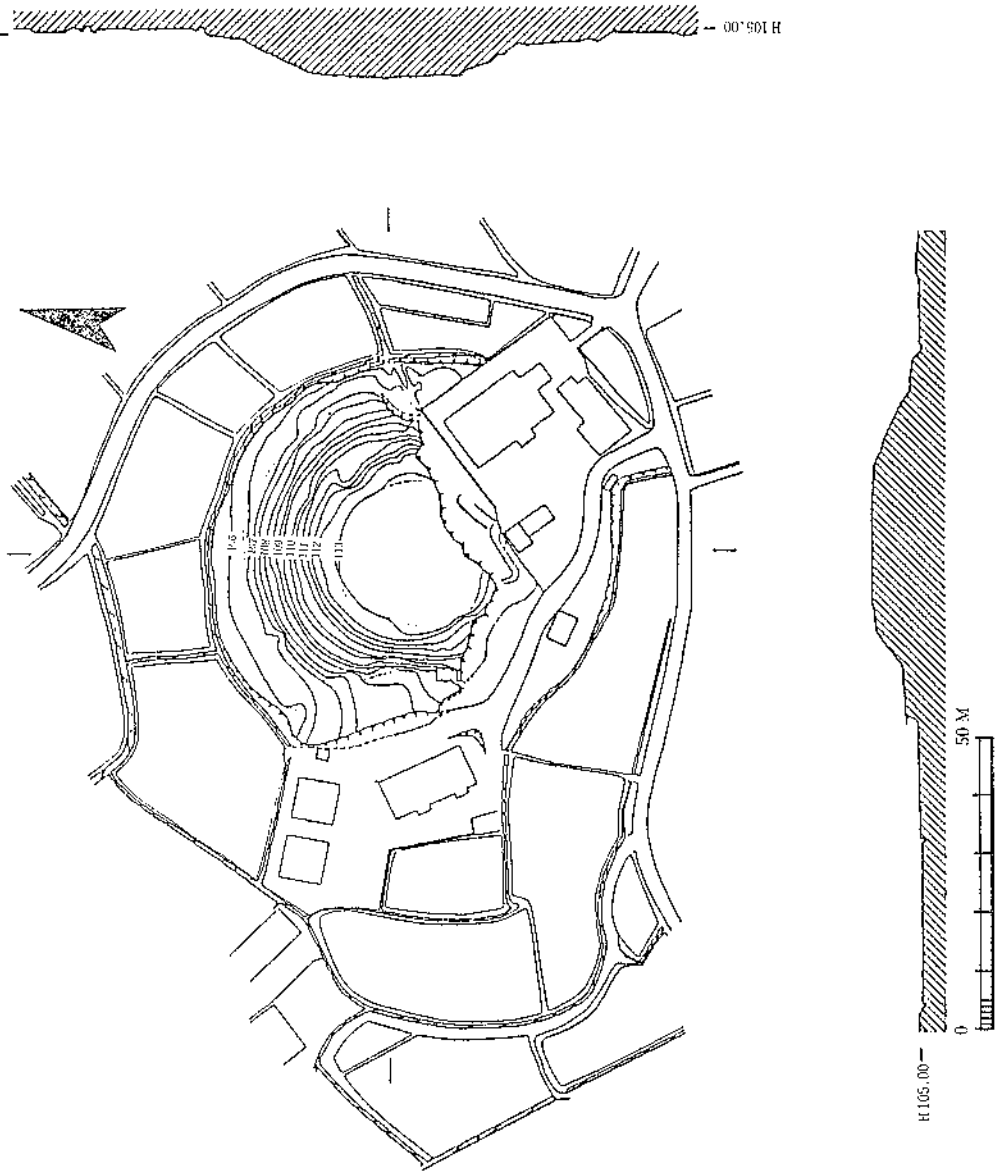
まず六地藏の丘陵上に所在する岡山古墳は、円墳とみられるほか、規模等明らかではないが、大正2年に発掘され、粘土槨とみられる主体部から舶載鏡2面が出土した。このうち天王日月鏡文帝三神三獸鏡は、大分県赤塚古墳鏡、三重県筒野古墳鏡など3面と同範であることが指摘されている。<sup>(8)</sup>

出庭の平地に所在する亀塚古墳は、開墾のため、墳形や規模は明らかでないが、円墳ないし前方後円墳とされ、明治44年一部が発掘された。粘土槨とみられる主体部からは、仿製の三神三獸鏡1面のほか、刀・土器が出土した。このうち三神三獸鏡は、鳥取県大將軍塚古墳鏡、伝京都府稲荷山古墳鏡、愛知県大塚古墳鏡など5面と同範であることが指摘されている。<sup>(9)</sup>

岡山古墳・亀塚古墳は、出土鏡などから、4世紀前半代に前後して築造されたことは確実で、後述する野洲川右岸の勢力とともに、この地域の首長が、早くも大和の政権と、何らかの同盟関係に入ったことを窺わせる。なお、この両墳も含め、野洲川下流域には、現在5基にのぼる最古式の古墳が知られており、上述の銅鐸の大量出土とともに、この地域の重要性を確認することができる。

栗東地域で、岡山・亀塚に後続するとみられる首長墓は、北東部の丘陵・台地上に、古墳群として一つのまとまりを持っており、大きくは、金勝川左岸の栗東町下戸山、草津市山寺町の丘陵とその西麓（下戸山地域）、金勝川右岸の栗東町安養寺の山腹と西麓（安養寺地域）の二つのグループに細分される。

まず下戸山地域では、山寺町北谷の丘陵上に築造された、北谷11号墳が最古で最大の規模を持っている。昭和35年、名神高速道路の建設に伴う採土工事に先立ち、丘陵上に所在する計11基の発掘調査がなされ、その全様が明らかになった。<sup>(10)</sup> 古墳の大半は、横穴式石室を持った後期のものであったが、最高所に立地する11号墳は、調査時点では、直径50メートルの円墳とされ、その後の再検討によって、後円部径64メートル、前方部幅35メートル、全長105メートルの前方後円墳であることが明らかになった。<sup>(11)</sup> 主体部は粘土槨で、残存長5メートル、推定10メートル前後の割竹形木棺を埋置しており、棺の内外より、仿製方格規矩鏡1面をはじめ、鍬形石5点、鉄剣



第2図 梅山古墳墳丘測圖(駿國・谷口徹氏)

27本、鉄刀1本、鉄鉢4本、鉄鏃9本など、大量の副葬品が出土した。出土遺物より、4世紀後葉に築造されたと推定され、岡山・亀塚古墳に後続する首長墓であることが判明する。そして、その規模は、安土町瓢箪山古墳、大津市膳所茶臼山古墳につぐ、県下第三位であり、この地域の首長の権威が、飛躍的に伸長したこと、大和の政権との関係が、さらに深まったことを示している。そしてそれと同時に、大量の鉄製武器の副葬は、被葬者の武人的な性格を憶測させるのであ

る。

北谷11号墳につづく首長墓は、下戸山地域から安養寺地域に移り、安養寺山西麓の平地に、大塚越・椿山という、大型の前方後円墳が相ついで築造されている。

大塚越古墳は、昭和8年採土工事によって消滅したが、前方部を北に向けた、全長75メートル前後の規模をもつ、前方後円墳であったとされる。工事の際、後円部の粘土槨とみられる主体部より、舶載二神二獸鏡1面、仿製素文鏡1面、三角板革綴短甲1領、鉄刀、巴形銅器、琴柱型石製品、玉類など、大量の副葬品が出土した。<sup>(12)</sup>これらにより、おおよそ5世紀前半代に築造されたとみられ、北谷11号墳につぐ内容をもった首長墓であることが判明する。

椿山古墳は、大塚越古墳の北西50メートルに所在する帆立貝式前方後円墳である。昭和27年、畑地化により前方部を失っているが、後円部径75メートル、推定全長100メートルをはかり、幅16メートルの周濠がめぐり、帆立貝式古墳としては、県下最大、全国的にも上位にランクされる大型古墳である。畑地化の際に、前方部より、三角板革綴短甲1領、鉄剣9本、鉄鏃120本などの出土があり、<sup>(13)</sup>昭和55年以降、数次にわたってなされた。周濠の調査によって、多数の円筒埴輪が出土した。<sup>(14)</sup>これらによって、おおよそ5世紀中葉ごろに築造されたとみられ、大塚越古墳につづく首長墓であることが判明する。

以上によって、5世紀以降、安養寺地域に墓域を移した首長墓が、やや規模を縮小したものの、依然として大きな勢力をもち、大和の政権との同盟関係を、さらに持続させていたことが判明するが、それと同時に、豊富な鉄製武器や甲冑の副葬は、前代の首長と同じく、その武人的・軍事的性格を示すもので、首長墓の規模なども合せて考えるなら、この地域の首長が、大和の政権の有力な同盟者として、初期の国内征討や、海外遠征に、重要な役割を果たしたことを憶測させるのである。そして、この推定を裏付けてくれるのが、これら平地に占地する大型の首長墓群に並行して、安養寺山から派生する、いくつかの小尾根に、豊富な副葬品をもって築造をみた、別系諸とみられる、中・小古墳の存在である。

すなわち、これらは、いずれも径30～50メートルをはかる円墳ではあるが、この地域の首長とその周辺の動向を知る上で、看過し得ぬ内容をもつもので、その大半は、昭和34年から35年にかけて、名神高速自動車道の建設に先立って、発掘調査が実施されたものである。<sup>(15)</sup>

下味古墳は、安養寺山西北、川辺の尾根上に所在した。径35メートルをはかる中型の円墳で、東西に二つの主体部をもち、それぞれに小型の粘土槨を伴っていた。第一主体からは、仿製の内行花文鏡1面をはじめ、勾玉・石訓・管玉・鉄剣・鉄刀子・鉄斧・鉄鉈などが、第二主体からも、仿製櫛歯文鏡1面のほか、勾玉・管玉・小玉・石訓などの玉類、鉄鉈・鉄刀・刀子・鉄鉈・鉄斧など鉄製品多数が出土した。

下味古墳の北側の尾根に所在した新開古墳は、北側に二号墳、南側に一号墳があり、二号墳については盛土の大半を削平され、主体部の一部を残存するだけであったが、一号墳は径35メートル前後の円墳で、南北二つの埋葬施設をもっていた。いずれも木棺を直葬した簡単なものであったが、北棺には、仿製の五獣鏡と盤龍鏡各1面のほか、鉄剣・鉄刀・鉄刀子各2本、勾玉・管玉各2点、有孔円板・櫛各1点が副葬され、南棺にも、仿製変形神獸画像鏡1面をはじめ、鉄刀2

本、鉄剣5本、鉄鏃8本、鉄矛3本など鉄製武器のほか、三角板革綴衝角付冑1領、小札鍔留眉庇付冑4領、三角板革綴短甲1領、長方板革綴短甲1領、三角板鍔留短甲1領、横柄板鍔留短甲1領などの甲冑類、鉄地金銅透彫鏡板付簪1個、鉄板装木鞍1個、木芯鉄板被輪鍔2組をはじめとする馬具などが、豊富に副葬されていた。

新開古墳の北の支丘にも、山寺屋敷古墳が所在したが、すでに大半を削平されており、そのさらに北の支丘に、山ノ上古墳が所在していた。これも墳丘の大半を削平されていたが、粘土槨の一部が残存し、棺内より舶載二神二獸鏡1面、鉄剣7本、ガラス製小玉4個、石訓1個が出土した。

山ノ上古墳の北の小尾根に所在した毛刈古墳は、径10メートル前後の円墳で、主体部は木棺直葬であった。棺の内外より、仿製回乳変形文鏡1面、滑石製勾玉2個、石訓1個、管玉72個が出土した。

毛刈古墳の北の小尾根に所在した佐世川古墳は、径47メートル、高さ3メートルの大型の円墳で、全長5メートルをはかる粘土槨に埋置された棺内からは、鉄剣7本、刀子2本、鉄刀1本、鉄鏃5本などが出土し、周辺部より形象埴輪の出土も知られる。

以上のように、安養寺山西麓の小尾根上には、豊富な副葬品をもった中・小の円墳が、多数築造されているが、これらは出土遺物より、おおよそ4世紀末から5世紀中葉にかけて、相ついで築造されたことが知られる。したがって、平地に築造された首長墓とほぼ並存していたことは確実で、鉄製武器や、甲冑・馬具などの副葬品においても共通性はみられるものの、すべて円墳の形態をとり、規模も首長墓と比較して、やや小さい点で、性格を異にするとと言える。したがって、これら中・小古墳の被葬者は、この地域の首長に準じる地位にあった部将を想定しうるのではなかろうか。

一方、橋山古墳に続く首長墓の系譜は、安養寺地域では途絶え、再び下戸山地域にもどったとみられる。下戸山の小槻大社の丘陵の先端に所在する下戸山古墳は、全長60メートルの帆立貝式の前方向後円墳で、未調査のため詳細は明らかでないが、立地や墳形から、5世紀代を降ることはないと思われる。そして、下戸山古墳に後続するとみられるのが、下戸山古墳の西北100メートルの、日川の平地に所在する地山古墳である。径56メートルをはかる大型の円墳で、周辺の水田畦畔の状況から、幅10メートル前後の周濠をもつことは確実で、県下でも最大級の円墳である。<sup>(16)</sup>未調査で、その実態は明らかではないが、昭和61年度の岡遺跡の調査で、周辺地域より、6世紀前半ごろの須恵器が出土しており、<sup>(17)</sup>それを前後する時期に築造されたとみられる。

以上のように、栗東地域の首長墓の系譜は、まず4世紀後半代、下戸山地域に北谷11号墳が築造されるが、これに続く大塚越古墳、橋山古墳は、安養寺地域に移動する。そして、それとともに、別系譜の豊富な副葬品をもった中・小円墳が丘陵上に並行して築造されている。しかし5世紀後半代には、再び下戸山地域に、下戸山古墳、地山古墳が築造され、墓域の移動がみられたのである。そして、これらの諸古墳で特徴的なことは、その副葬品に示される、被葬者の軍事的・武人的な性格であった。

そこでまず、墓域の二度にわたる移動の事情については、必ずしも明確ではないが、一つには

栗東地域における集落の動向と連動している可能性が考えられる。すなわち、この地域の弥生時代の集落は、金勝川下流域の、霊仙寺・下鈎地域に中心を持っていたが、弥生時代末から古墳時代にかけて、野洲川左岸の高野・辻・岩畑の地域が急速に発展、奈良時代にかけての中心的な集落になるのである。<sup>(18)</sup>この集落の移動が、自然環境の変化によるものか、農業技術の発展に起因するものか、あるいは何らかの政治的要因によるものか、にわかに決し難いが、安養寺地域への首長の墓域の移動が、山腹部の豊富な副葬品をもつ中小古墳の展開と深くかかわることは確実で、それが野洲川左岸の集落の飛躍的な発展とも、連動していた可能性が大きいと考える。そして、その点と関連して興味深いのは、安養寺地域の古墳群に並行して存続したとみられる、野洲川左岸の岩畑遺跡において、多数検出された堅穴住居跡より、鉄鏃など鉄製武器が異例に多く発見されていることである。これはさきに指摘した古墳群の武人的・軍事的性格と対応するものであって、両者の関連を裏付けると言えよう。

一方、下戸山地域への首長墓の再移動については、何らかの政治的な要因があったとみられるが、その手がかりとなる第一点は、栗東地域においても、6世紀中葉以降、ほぼ全域にみられた後期群集墳が、下戸山地域に集中する傾向がみられることで、政治的な重心がこの地域を志向していることを反映したものであろう。<sup>(19)</sup>そして、これと関連して注目される第二点は、栗太郡衙とみられる岡遺跡が、下戸山地域、地山古墳の東に接して発見されたことである。現在のところ岡遺跡は8世紀初頭から11世紀まで存続したとみられているが、栗太郡の中心が、この地域を志向している事実は、看過し得ぬところであろう。<sup>(20)</sup>そして第三点として、この下戸山地域に、名神大社、小槻大社の鎮座している事実が指摘される。後述するように小槻大社は、栗太郡の郡領級氏族小槻山君氏の氏神であり、この地域のイデオロギー的な中核であったとみられる。したがって、この地域の政治的な変動期に、絶えず立ちもどる原点でもあったのではなかろうか。

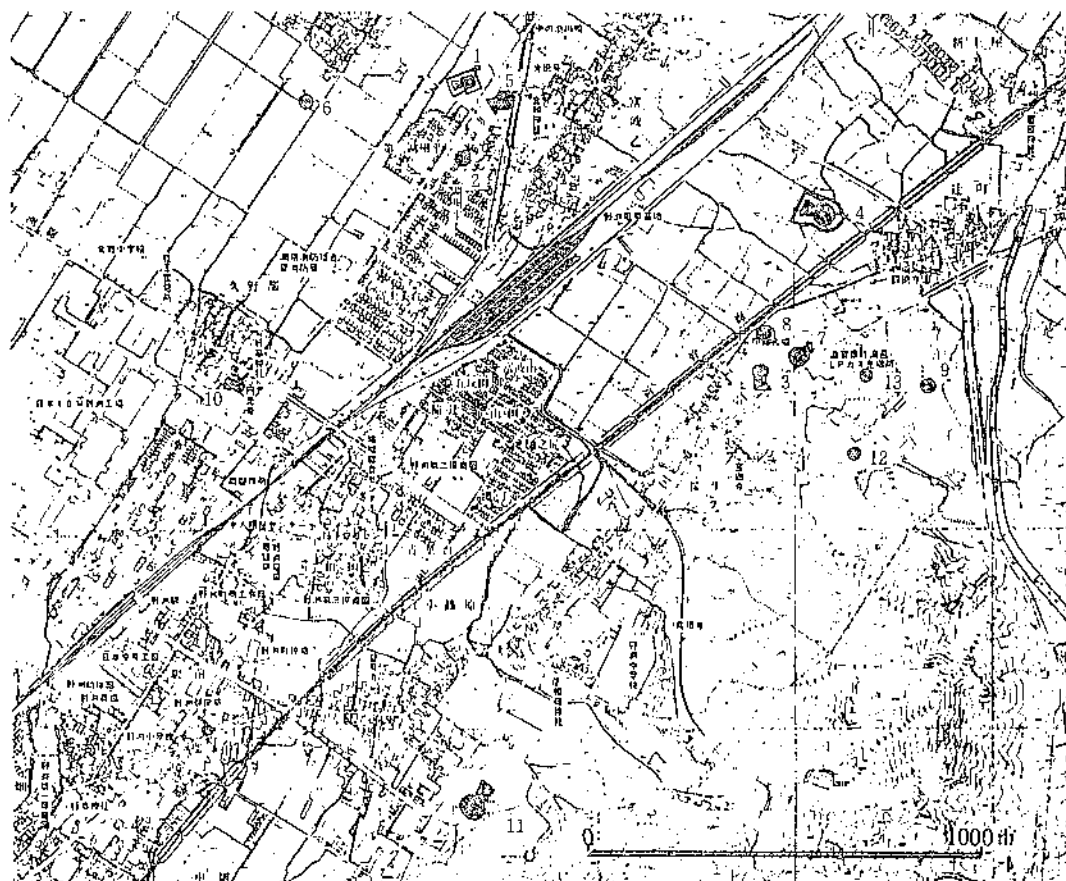
以上の不十分な検討によっても、この地域の首長が、早くも4世紀の前半代には、大和の政権と「同盟関係」に入っていたこと、4世紀後半には、この地域の首長権が確立し、5世紀代にはさらに進展して、この地域の首長は、大和の政権の有力な「同盟者」として、大和の政権による、国内の征討、海外遠征において、大きな軍事的役割を果たしたこと、6世紀以降も、やや勢力を後退させながらも、郡領氏族への道を確実に歩んでいることが、曲りなりにも明らかにできた。そこで次に、野洲川右岸地域の動向を検討して、両者を比較することにしたい。

### 3. 野洲川右岸地域の古墳と古墳群

野洲川右岸の首長墓の系譜は、神奈備三上山の西麓、半径1.0キロメートルの範囲内に分布する、大岩山古墳群として、一つのまとまりをもっている。

まず出現期の古墳としては、野洲町富波の平地に築造された古富波山古墳を筆頭として、銅鐸の大量出土で知られる、大岩山の周辺の山腹に築造された、天王山古墳、大岩山第二番地山林古墳、大岩山古墳などが知られる。

古富波山古墳は、径27メートル前後、高さ1.7メートル以上の円墳とみられ、全長6.0メートル以上の長大な割竹形木棺を主体部としているが、明治29年、一部の発掘がなされ、舶載の四神に



1. 富波古墳 2. 古富波山古墳 3. 天王山古墳 4. 大塚山古墳 5. 亀塚古墳  
 6. 五之里古墳 7. 円山古墳 8. 甲山古墳 9. 宮山2号墳 10. 久野郎古墳  
 11. 越前塚古墳 12. 大岩山第二番地山林古墳 13. 大岩山古墳

第3図 野洲川右岸の首長墓（注(29)文献の図を改訂）

獸鏡、四神四獸鏡、三角縁三神五獸鏡各1面の出土が知られるほか、<sup>(21)</sup>近年の調査で庄内式に並行する土器が出土し、近江でも最古期に属する古墳とみられている。<sup>(22)</sup>

天王山古墳は、全長45メートルの前方後円墳とみられるほか、未調査のため実態は明らかでないが、墳形などから古富波山古墳に後続するとみられている。<sup>(23)</sup>

大岩山第二番地山林古墳は、墳形や規模は明らかではないが、一応円墳とみられその粘土槨中から、舶載の獸縁文尚方盤龍四神鏡、三角縁盤龍畫象帯鏡、三角縁陳氏作神獸鏡、三角縁日月天王神獸鏡など5面が出土しており、古富波山・天王山に後続する内容をもっている。<sup>(24)</sup>

同じく大岩山古墳についても、墳形、規模は明らかでないが、明治8年には、仿製の三角縁獸帯三神三獸鏡、変形神獸鏡など古鏡2面のほか勾玉などが出土し、古式の古墳と考えられる。<sup>(25)</sup>

以上のように、野洲地域の古式古墳は、規模や墳形など、栗東地域のそれに比較して大きな差異はなく、この時期の野洲川をはさんだ二地域の勢力は、ほぼ均衡していたと考えられる。ただ、その副葬品、特に古式鏡の質と量は、野洲地域のものが卓越しており、前代の銅鐸の埋納にみら



れた力関係が、引き続いて存在していたこともうかがえよう。

これらに続く野洲地域の首長墓は、右にみた栗東地域のそれと比較する時、かなり見劣りすることは否定できない。まず、辻町の北西の平地に所在する、大塚山古墳は、全長65メートルの帆立貝式の前方後円墳で、幅8メートル前後の周濠が馬蹄形にめぐっている。未調査のため、時期など明確にできないが、墳形や立地からみて、5世紀の中葉から後半に比定できよう。<sup>(26)</sup>

また富波乙の生和神社の西の水田中に所在する亀塚古墳も、全長30メートル以上の帆立貝式古墳で、周濠をもつことが知られている。これも未調査のため、時期など明らかにできないが、大塚山古墳に前後して築造されたことが推測される。<sup>(27)</sup>

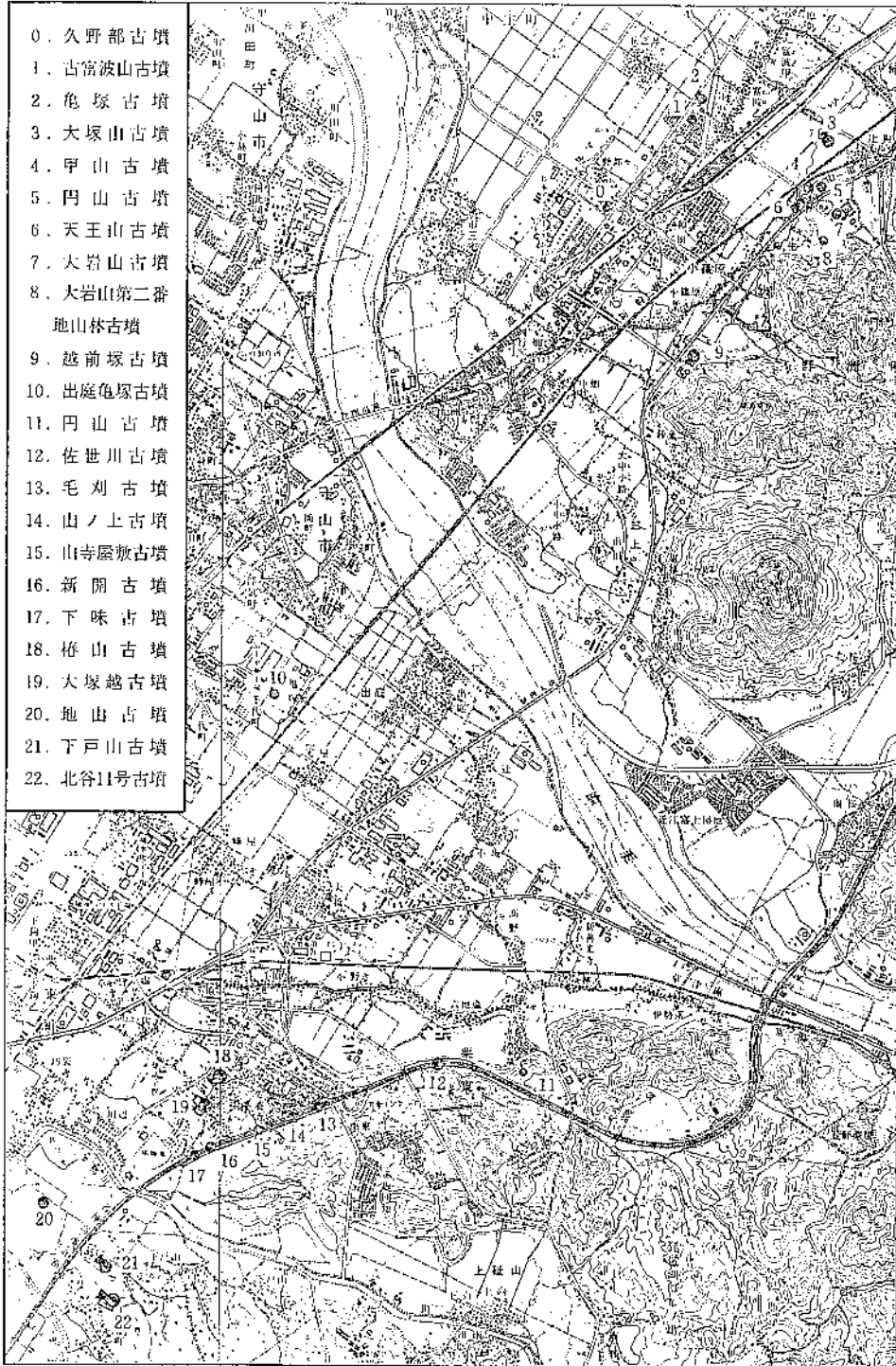
このほか、中期古墳としては、五之里の平地に所在する五之里古墳や、久野部の寺地に所在する久野部古墳などが知られているが、いずれも小規模なもので、北谷11号墳、大塚越古墳、椿山古墳と続く栗東地域の首長墓に比較して貧弱な様相を示している。このことは、野洲地域にあっては、その首長権が大岩山古墳群の被葬者の系譜に、完全に集中していなかったことを示すと同時に、栗東地域の勢力が、野洲地域のそれを、大きく凌駕していたことを推測させるのである。なお、野洲地域における首長権の未確立を裏付けるものとして、中主町木部の木部古墳や五条の御明田古墳の存在、或は守山市川田の川田古墳、金ヶ森の庭塚古墳の存在を指摘して、地域内における諸勢力の割拠を推測することも可能であろう。

後期に入ると、野洲地域では、妙光寺山西麓の独立丘に、全長69メートルの前方後円墳、越前塚古墳が築造される。小規模な石材を小口積みした、古式の横穴式石室をもつもので、5世紀末から6世紀初頭ごろに比定されている。<sup>(28)</sup>次いで、大岩山西麓の山丘に、円山、甲山の二大円墳が、相ついで築造されている。

円山古墳は、径37メートル、高さ7.8メートルをはかり、北東に長さ10メートル余の低い張り出しがあり、帆立貝式古墳とも考えられるが、全長2.84メートルの巨石を使用した横穴式石室内には、二上山系の凝灰岩を使用した大型の家形石棺が埋置されていた。その形態より、6世紀前半代に比定されるが、甲山古墳も、径34メートル、高10メートルをはかる大型の円墳で、全長2.6メートルの巨石を使用した石室内に、同じく凝灰岩を使用した大型の家形石棺を蔵しており、いずれもこの時期では、県下最大の規模をもつものである。<sup>(29)</sup>









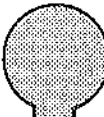








以上のように、5世紀末以降、野洲地域の首長権は、地域内にとどまらず県下においても、飛躍的に高まったことが知られる。右にみたように、この時期の栗東地域の勢力は、やや衰退しており、野洲地域の首長が、この段階に至って、始めて野洲川下流域における、大和政権最大の同盟者となったと言えるのである。

以上、野洲川右岸勢力の実態と、左岸地域のそれと比較しつつ、若干の検討を加えてみた。それによるなら、まず4世紀前半代から中葉前後においては、やや野洲地域の勢力が優位を保ちつつも、ほぼ均衡していた両岸の勢力は、4世紀末の北谷11号墳の出現で、栗東地域の首長権が飛躍的に伸長したのに対し、野洲地域においては、5世紀の末葉段階まで、地域内の勢力の割拠もあって、余りふるわなかったことが知られる。栗東地域では、5世紀後半代まで、首長墓はその規模を維持し、その地位に大きな変動のなかったことが判明するとともに、これらに並行して、



第4図 野洲川下流域の首長墓の分布

豊富な副葬品をもつ、別系譜の中・小古墳の存在もあり、さらに強化されたことが確認される。しかしながら、5世紀末から6世紀前葉にかけて、栗東地域の勢力が、やや後退したのに対し、野洲地域の首長権の伸長が著しく、近江国全体でも、最有力の地位に上昇しているのである。

野洲川左岸地域	野洲川右岸地域
 岡山古墳  出庭亀塚古墳  105 北谷11号墳	 30 古富波山古墳  46 天王山古墳  大岩山第二番地 山林古墳  大岩山古墳
 75 大塚越古墳  100 椿山古墳  60 下戸山古墳	 65 大塚山古墳  30 亀塚古墳  久野部古墳  69 越前塚古墳
 56 地山古墳	 37 円山古墳  34 甲山古墳

第5図 野洲川下流域の首長墓の比較

栗東地域の首長が、早くから大和の政権の有力な同盟者として、大きな勢力を得たことについては、さきに指摘したように、その強い軍事的色彩からみて、大和政権による初期の「国土統一」や海外遠征に、深くかかわったことが、大きな背景をなしていたと推測されるが、野洲地域の首長の勢力伸長については、その時期が、大和政権による機構的な再編、或は本格的な国家機構の形成期に当たっていることを想起するなら、大和政権による新たな地方支配の進展と、不可分に結びついていることが憶測されてくるのである。<sup>(30)</sup>そこで次に、やや視点をかえ、文献史料に

よって、古代豪族の動向を検討し、地域史の再構成を追求したい。

#### 4. 野洲川下流域の古代豪族

前二節にわたって、主として考古資料に依拠し、野洲川下流域の地域史の動向を追究してきた。ここではまず文献資料によって、この地域の古代豪族の動向を検討して、前二節の成果と合せて、地域史の再構成をはかろうとするものであるが、考古資料の蓄積にくらべ、文献資料は、きわめて限定的なものにすぎない。したがって、小論も、一つの試論、覚書の域を出るものではないことは、いうまでもないところである。

##### (1) 栗太郡の古代豪族

まず、栗太郡内に居住したとみられる古代豪族としては、第6図に掲出したように、ごく一部が知られるにすぎない。これらは、その出自などによって、大きく三群に分類される。第一群は、小槻山君と建部君で、『記・紀』に出自伝承をもち、君という有力なカバネをもつ点で、他と区別されよう。第二群は、川瀬舎人・笠・物部・吉身など郡内或いは隣接地域の地名を負うもの。第三群は、磐城村主、大友曰佐、上村主、王公、志何史、月本などの渡米系の氏族である。これら三群のうち、栗太郡内で最も有力で、しかも伝統のある豪族は、やはり第一群の二氏であろう。第二群のうち、川瀬舎人氏については、今一つ明確でないが、笠氏は、現在の草津氏上笠・下笠の地とかかわる豪族とみられるし、物部氏も『和名抄』の物部郷と、吉身氏も吉身庄（現在の守山市吉身町の地）とかかわるとみられ、必ずしも郡全域を押える豪族とみることはできない。第三群の渡米系氏族の場合も、磐城村主氏が、『日本書紀』天智3年12月条に、米墾地を開発して富を得た所伝があるほか、野洲郡の福林寺の造立者や、最近発見された中主町森ノ内木簡にもその名がみえ、野洲・栗太両郡にまたがって勢力を得ていたことが知られるが、その所伝にもあるとおり、新しい渡米系の技術によって勢力を得た新興の氏族と考えられる。<sup>(41)</sup>大友曰佐氏は、栗太郡木川郷にも居住しているが、その本拠は、近江国滋賀

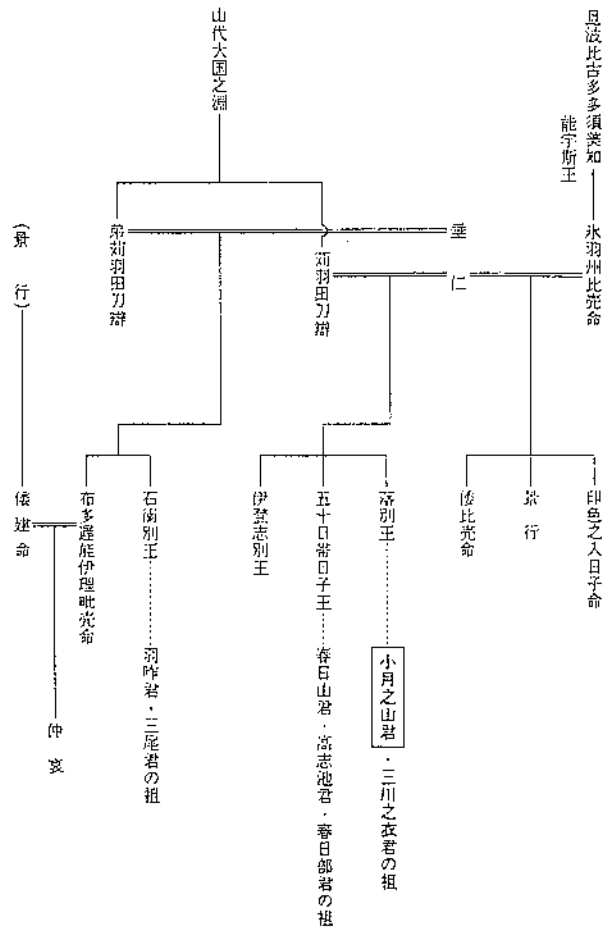
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫
氏名	小月之山君 小槻山君 建部君 建部公伊賀麻呂 川瀬舎人 磐城村主殿 石木主寸 上村主楯 王(公)広嶋 大友曰佐棟麻呂 志何史堅魚麻呂 笠 物部 吉見国貞 月本											
出典	垂仁記 『正倉院文書』天平八年八月 景行記 『続日本紀』天平神護二年七月 雄略紀十一年五月 天智紀三年十二月 森ノ内1号木簡 『正倉院文書』宝字六年八月 『正倉院文書』宝字七年二月 『正倉院文書』天平十七年 『正倉院文書』天平十七年 『金胎寺本尊胎内銘』 永治二年五月											
記事	垂仁皇子落別王の後 従八位上 栗太采女	近江国志賀郡大毅	近江国栗太郡	近江国栗太郡人	近江国野洲郡某郷戸主	近江国栗太郡人	岡田村跡物師	近江国栗太郡木川郷戸主	近江国栗太郡木川郷戸口			
備考	朝臣を賜姓			八世紀前半 造東大寺司 造石山寺所								

第6図 栗太郡の古代豪族

郡古市郷、錦部郷にあったとみられ、野洲郡や蒲生郡にもみられるほか、山背国、河内国にも居住が知られる渡来系氏族である。また、上村主氏も、『新撰姓氏録』左京諸蕃上に、魏武皇帝の男、陳思王の後とあって、右京諸蕃上や摂津国諸蕃にみえる廣階連氏や、河内国諸蕃にみえる、河原藏人・河内画師・河原連・野上連などの諸氏と同祖とされており、その基盤は本来河内にあった可能性が高い。志何史氏も、近江国滋賀郡に居住する大友村主や錦部村主と同族で、いわゆる志賀漢人の一族である。いづれにしても第三群の諸氏も、もともと栗太郡にかかわる氏族とは考えられない。

第一群の建部君は、倭建命の子稲依別王を祖とする有力豪族ではあるが、その本拠としては、栗太郡の南端、瀬田川辺に鎮座する建部大社付近が想定され、同じ栗太郡内でも、

基盤が異なるようであり、野洲川左岸地域に直接かかわる伝統的な古代豪族としては、金勝川左岸の下戸山に鎮座する小槻大社を氏神とする小槻山君が唯一浮び上がってくる。小槻山君については、『古事記』垂仁天皇段に、垂仁天皇と山代大國之淵の女菟羽田刀辨との間に所生した落別王が、「小月之山君、三川之衣君之祖也」とあり、垂仁天皇に出自する皇別を主張し、また公認されていた有力な豪族であったことが知られる。菟羽田刀辨の妹弟菟羽田刀辨と垂仁天皇の間に所生した石衝別王が、継体天皇擁立とかかわる、三尾君や羽咋君の祖とある点や、『旧事本紀』国造本紀に、伊賀国造が意知別命の後とあることなど注目される点も少なくないが、直接小槻山君の一族の動向を示す記載は、『記・紀』には全くみえないのである。小槻山君一族の初見は、天平8年8月26日付「内待司牒」に栗太采女とみえる小槻山君広虫で、『続日本後紀』嘉祥2年7月条に、近江国栗太郡人で木工大允正七位下の小槻山公家嶋がみえるほか、『三代実録』貞観17年12月条には、左京人、右大史正六位上兼行等博士、小槻山公今雄、主計等師大初位下小槻山公有緒、近江国栗太郡人前伊豆権目正六位上小槻山公良真らの名がみえる。このうち、さしあたって注目されるのは、「栗太采女」とある小槻山君広虫の存在である。広虫の父或は兄が栗太郡の郡大領・少領か、それに準ずる地位にあったことが、ここから推定されるわけで、小槻山君が、



第7図 小槻山君始祖系譜(『古事記』による)

栗太郡において、郡司に任命される、有力な郡領豪族であることが判明するのである。<sup>(33)</sup>そして、それと同時に、広虫がこの時（天平8年）、従八位上であったが、翌天平9年2月には、正八位下から外従五位下に昇進、天平17年に外正五位下、天平勝宝元年には正五位下、天平勝宝四年には従四位下を授与されるなど、異例の昇進を果していることは、広虫の個人的な力量もあろうが、<sup>(34)</sup>小槻山君の在地における地位とも、深くかかわると考える。

以上のように、小槻山君は、栗太郡内では、伝統的な勢力をもつ、有力な豪族であることが明らかになった。そして、このことは、文献によって、必ずしも裏付けることはできないが、小槻山君が予想以上に古くから、この地域を基盤とし、大和の政権と結託関係を結んでいたことを憶測させるように考える。

周知のように、栗太郡は、滋賀郡とともに近江の最南端に位置し、いわゆる畿内国と直接対峙する位置にあり、特に、瀬田川の下流域を通じて、南山城から大和への交通路が早くから開けていた可能性が高く、近江の中では、大和の政権と早い段階で、接触したと考えられるのである。その点で注目されるのは、小槻山君が「山君」を称している点である。近江には「君」のカバネをもつ豪族が比較的多いが、その中で「山君（臣）」を称するものも、若干知られている。蒲生郡に本拠をもつ佐々貴山君、高島郡北部に本拠を置く都怒山君（臣）、そして小槻山君の三氏がそれで、佐々貴山君が顕宗紀の所伝に山部連氏の配下とあるように、それぞれの地域において山部を管理していたことと関連するとみられている。<sup>(35)</sup>山部の職掌については、直接的には山林生産物の貢納とみられているが、吉備や播磨の山部のように、鉄生産にかかわるものもみられる。<sup>(36)</sup>周知のように近江は、畿内近国における唯一の鉄産出国であって、その中でも都怒山君（臣）の本拠地高島郡北部と、小槻山君の本拠栗太郡は、古代の製鉄遺跡が集中する地域である。<sup>(37)</sup>その意味で近江の山部と鉄生産の関係も無視できない。前節で明らかになったように、野洲川左岸地域の首長墓や集落から、豊富な鉄製品の出土が知られることなどを考慮するなら、本格的な鉄精練技術は、現在知られる遺跡の状況からみて、7世紀代に導入されたとしても、その前段階にあって、輸入原料に依拠した鉄器生産が、この地域において発展していた可能性は、かなり大きいと考えられる。

また、山部の中央における統括者であった山部連氏が、伊予の久米直氏に出自し、しかも、いわゆる門号氏族十二氏の中に含まれ、大和政権の軍事面においても、重要な位置を占めていたことは、<sup>(38)</sup>小槻山君の性格を考える上で、無視できない点であろう。首長墓の武人的な性格、或いは集落における軍事的な出土遺物は、それを直接物語っていると見えるが、栗太郡内には、同じく軍事的な性格の強い豪族建部君氏が播擧すること、<sup>(39)</sup>さらに郷名に物部がみえることなど、それを裏付ける点も少なくないのである。このようにみえてくるなら、小槻山君は必ずしも、文献によって、直接証明することはできないが、さきにみた古墳群のあり方などからみて、大和の政権と、早くも4世紀末葉には、強固な同盟関係を結び、その初期「国内征討」や、海外における軍事的な行動に関与していたことが浮び上がってくる。

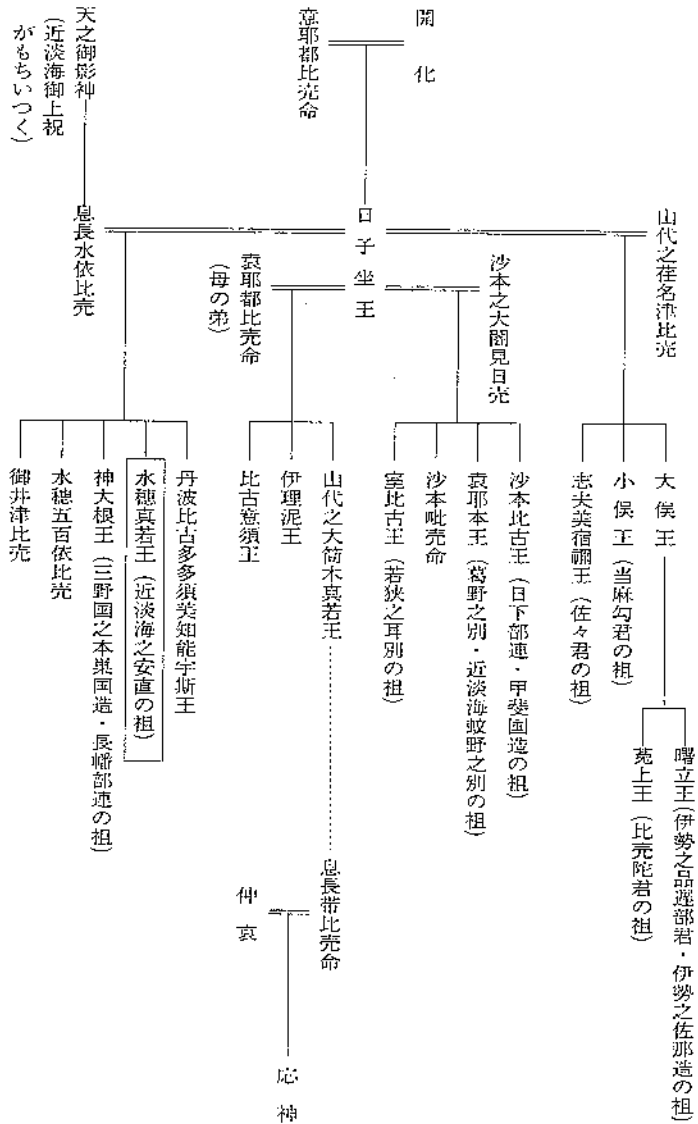
## (2) 野洲郡の古代豪族

次に野洲郡内における古代豪族としては、第8図に示したごとく、その検出例はきわめて少な

第8図 野洲郡の古代豪族

	氏名	出典	記事	備考
①	御上祝	開化記	天之御影神を奉祭	
②	近淡海之安直	開化記	日子坐王の子水穂真若王の後	
③	近淡海之國造	景行紀	日本武朝妃布多遲比売の父	意皇多牟和氣
④	安得奴志	正倉院文書 天平・十・二	写経所経師	夜須德主
⑤	吉美氏	天台座主記	第三十三代權大僧都勝範	近江国野洲郡人
⑥	吉身臣三田次	正倉院文書天平宝字六	滋賀国少貳	
⑦	紀吉往	後拾遺往生伝	近江国野洲郡馬淵郷人	
⑧	● 紀	承暦三・三・一〇某荘立券文		(中津神崎荘)
⑨	槻本氏	文徳美録・仁寿・三・九	僧正廷祥大法師卒・俗姓槻本氏	近江国野洲郡人
⑩	日佐	姓氏錄山城皇別	近江国野洲郡日佐	
⑪	秦倉人島麻呂	天平・五山背園愛宕郡某郷計帳	近江国夜珠郡山本郷	同宗世麻呂戸口
⑫	大友氏日佐龍人	續紀・延暦六・七	本姓を改め志賀忌寸を賜う	近江国野洲郡人
⑬	永野忌寸吉雄	三代家録・元慶三・九	本籍に還付	近江国野洲郡百姓
⑭	穴太野中央玉手	天平・十七・八・三任了透文	近江国野洲郡敷知郷戸主	
⑮	菟原史宿奈麻呂	同右	同右 戸口	
⑯	三上部阿閉	天平元(三・六計帳手実	近江国志何郡古市郷寄口	同戸主大友舟渡史
⑰	大友部龍	中主町森ノ内遺跡出土墨書土器		族言備麻呂寄口
⑱	● 伴	承暦三・三・一〇某荘立券文	神崎相口	(中津神崎荘)
⑲	大友	中主町森ノ内一号木簡		
⑳	卜部	中主町森ノ内二号木簡		七世紀後半
㉑	馬遣官少広			
㉒	石邊若玉足		『平城京木簡』に石邊玉足	益珠郡馬淵郷
㉓	三宅連唯麻呂	中主町森ノ内一号木簡	戸主名・身分・年令列記	八世紀前半
㉔	登美史東人			
㉕	佐多			
㉖	石木主寸			
㉗	石城村主宿禰	長治元・六・十七百官官察	近江国福林寺の建立者	天武朝建立
㉘	郡主寸得足			
㉙	黄文	中主町森ノ内一号木簡		
㉚	鳥	守山市服部遺跡出土墨書土器		八世紀後半
㉛	鳥益			
㉜	馬甘	森ノ内三号木簡		
㉝	神主家	森ノ内遺跡出土墨書土器		
㉞	越(殿)			
㉟	懸(大)	笠原南遺跡出土墨書土器		
㊱	林(家)			
㊲	田中	承暦三・三・一〇某荘立券文	西御鹿刀禰	(中津神崎荘)
㊳	矢田部	同右	惣刀禰	(同右)
㊴	藤井	同右	越後介	(同右)
㊵	藤井	同右	橘御園司	(同右)

い。野洲郡の場合も、これらの豪族は大きく三群に分類できる。第一群は、この地の伝統的な有力豪族、御上祝・安直の二氏で『記・紀』に所伝をもつことから、その地位をうかがうことができる。第二群は、吉美、永野忌寸、馬道首、石辺君など、小地域の首長層とみられるもの、第三群は、日佐、秦倉人、大友民日佐、三宅連、登美史、石木主寸、郡主寸など渡来系氏族である。これらの豪族のあり方は、必ずしも当時の実態を示すとは言えないが、渡来系氏族の分布が著しいことはまず注目される。そして、特に中主町森ノ内二号木簡の出現によって明確化した、滋賀郡に本拠をおく、志賀漢人系氏族の広範な存在は、この地域の動向を考える上で無視し得ないところである。すなわち、大友民日佐は、志賀忌寸に改姓しているように、滋賀郡に本拠をおく大友村主、穴太村主などの諸氏の一族であるし、佐多(忌寸)、石木主寸、郡主寸な



第9図 近淡海安国造関連系譜

ども、『坂上系図』所引姓氏録逸文によって、錦部村主や大友村主の一族であることが確認されるのである。そして登美史についても、その出自は明らかではないが、天平14年の「志何郡古市郷計帳」に、志何郡古市郷戸主大友丹波史族某の戸口に、登美史久御賣がみえ、滋賀郡とのつながりが判明する。そして槻本氏についても、天平8年「内侍司牒」に志我采女とみえる槻本連若子の存在によって、滋賀郡を基盤とすることが知られるのである。なお、この槻本連氏については、『日本書紀』朱鳥元年6月条に、槻本村主勝麻呂が連を賜姓されたとあり、志賀漢人の一族であった可能性が高い。

滋賀郡における漢人系渡来氏族の集往については、従来より大和政権による政策的なものともみられる見解が有力であったが、<sup>(41)</sup>山尾幸久氏は、日本海経由による対外交渉との不可分の関係を指摘



されている。<sup>(42)</sup>私はこれらの点から野洲郡における志賀漢人の存在についても、大和政権の政策的な導入の可能性が高いと考えるが、その場合、野洲郡内に設置された、葦浦屯倉との関連が注意される。屯倉の実質的な運営に、渡来系氏族の技術が導入されたとみるのである。

以上のように、第三群の渡来系氏族のあり方が理解されるなら、『記・紀』に始祖系譜をもつ第一群の伝統的な豪族の存在が、更めて浮上してくる。

御上祝と近淡海安国造については、開化記の「日子坐王系譜」に始祖伝承があって、開化天皇の皇子日子坐王と御上祝が奉祭する天御影神の女、息長水依比売との間に所生した水穂真若王の後に近淡海安直であるとみえ、景行記には、倭建命妃布多遲伊理毘賣の父に、近淡海安国造の祖意富多牟和氣がみえる。これらの所伝によって、近淡海安国造が開化天皇を祖とする皇別の氏で、倭建命の系譜にもつながっていることが知られ、大和政権によって、その政治的地位を一定公認されていたことが判明する。そして、それと同時に、近淡海安国造が、その母系系譜に、御上祝が奉祭する御上神社の祭神を上げていることは、御上祝との密接な関係を窺わせる。近淡海安国造の始祖系譜が、開化裔につながる以前の本来のあり方は、天御影神を祖とし、御上祝の女を母方の相としていた可能性が高いと考えるが、いずれにしても、御上祝と近淡海安国造は、本来一体の関係にあり、一族であったとも考えられるのである。周知のように近淡海安国造、或いは安直の姓は、国造制にかかわる、一種の官職的な氏姓であって、<sup>(43)</sup>いわゆる直姓国造が、吉備・筑紫・上毛野のような、君・臣姓の独立性の強い国造に比較して、より新しく、画一的に設定されたもので、大和政権への従属度も強いとみられていることを考慮するなら、<sup>(44)</sup>安国造の成立に対応して、御上祝との一種の祭政の分離がなされたと考えられることでもあるのである。このように考えるなら、近淡海安国造が、その政治的な立場を確立したのは、意外に新しく、国造制の再編がなされた推古朝の前後とみることができるのである。このことは、国造制の成立と密接につながる屯倉の全国的な設置が、安閑紀2年5月条にみえることから裏付けられる。すなわち安閑紀には、全国26ヶ所の屯倉一括設置がみえ、その中に近江国葦浦屯倉の名があるのである。葦浦屯倉の故地については、現在の守山市三宅町、草津市芦浦町付近が有力で、野洲郡と栗太郡の郡界の湖辺に当り、<sup>(45)</sup>屯倉の設置についても、当然安国造との関連を想定するほかはないのである。そして、その設置時期についても、いわゆる「継体・欽明朝内乱」との関連も指摘されるが、欽明朝以降のミヤケ制の再編にかかるものとみられ、国造制の再編とも運動する、6世紀の国政改革にかかわると、考えられるのである。<sup>(46)</sup>

以上のように、近淡海安国造の動向がとらえられるなら、さきに検討を加えた、野洲地域の首長墓の動向とも、多くの点で付合することが指摘される。特に5世紀の段階にあって、野洲川左岸の勢力に比較し、貧弱な様相を呈していた首長墓のあり方が、6世紀段階以降急速に伸長し、逆に大きく凌駕する勢を示している事実は、まさに安国造の成立という政治的な契機と深く連動していると考えられるのである。

## 5. ま と め

野洲川下流域の古代豪族、特に左岸地域の小槻山君と右岸地域の安直を中心に、考古・文献資

料の両面から、若干の検討を加えた。そこで明らかになったのは、次の諸点である。

- (1) 両地域の首長幕の動向によるなら、4世紀前半代までは、ほぼ均衡していた勢力が、4世紀後半から5世紀末にかけて左岸の勢力が大きく伸長したとみられる。
- (2) 6世紀初頭以降、右岸勢力が急成長し、かわって左岸の勢力は、やや後退した様相が認められる。
- (3) 左岸地域の中核的な首長家とみられる小槻山君は、初期大和政権の主要な構成員として、「国内統一」や海外への軍事的行動において、重要な役割を果たしたとみられる。
- (4) 右岸地域の首長とみられる安直は、6世紀以降の国政改革の中で、近淡海安国造としての地位を確立したとみられるが、それ以前は必ずしも中央における政治的立場は強くなかったとみられる。

これらによって、従来言われるように、野洲川右岸を基盤とする安国造家が、必ずしも古い段階から、近江において中心的な勢力であったわけではなく、その政治的地位の上昇は、少なくとも6世紀以降、国造制の再編にかかわることが明らかになった。それと同時に、これまであまり注目されていなかった左岸地域の小槻山君が、意外に早く大和政権の主要な構成員となり、その軍事面で重要な位置にあったことが明らかになった。ただ、野洲川下流域の地域史的な検討は、その一端にふれただけで、具体的な問題については、ほとんど解明できなかった。特に安国造と深くかかわる葦浦屯倉の実態、それとのかかわりが推定される渡来系氏族の性格と動向については、さらに検討の必要がある。その意味で、小論は野洲川下流域の地域史にとって一つの前史の解明にとどまるものと言えよう。

#### 註

- (1) 丸山竜平「原始・古代の野洲」(『野洲町史』第1巻、通史編1、野洲町、1987年)
- (2) 丸山竜平「大岩山古墳群の意味するもの」(『野洲町大岩山古墳群』、近江考古学研究会、1973年)
- (3) 小林健太郎「地形と地質」(『草津市史』第1巻、草津市役所、1971年)
- (4) 柏原亮吉編「滋賀県史蹟名勝天然記念物概要」(滋賀県、1936年)山本清之進『栗太郡志』(滋賀県栗太郡役所、1905年)
- (5) 註(4)に同じ
- (6) 梅原末治「栗太、野洲両郡に於ける二・三の古式墳墓の調査報告」(『考古学雑誌』12-3、1921年)
- (7) 註(4)に同じ、丸山竜平「草津市追分古墳の再評価」(『滋賀文化財だより』38、1980年)
- (8) 小林行雄「同範鏡考」(『古墳時代の研究』所収、青木書店、1961年)
- (9) 註(8)に同じ
- (10) 西田弘『草津市山寺町北谷古墳群発掘調査概報』(滋賀県教育委員会、1961年)
- (11) 中司照世・川西宏幸「滋賀県北谷11号墳の研究」(『考古学雑誌』66-2、1980年)
- (12) 柏原亮吉「滋賀県史蹟名勝天然記念物概要」(前掲)

- (13) 註(1)に同じ
- (14) 大橋信弥「古墳と首長」(『栗東の歴史』第1巻・古代中世、栗東町役場、1988年)
- (15) 鈴木博司・近江昌司「栗東町安養寺古墳群発掘調査報告」(『滋賀県史蹟調査報告』第12冊、滋賀県教育委員会、1961年)
- (16) 註(14)に同じ
- (17) 古代を考える会「岡遺跡の検討」(古代を考える46、1987年)、岡遺跡では、6世紀前半から7世紀前半の方墳数基が検出されており、地山古墳にかかわるものか。
- (18) 小笠原好彦「古墳時代の集落とムラ」(『栗東の歴史』第1巻、前掲)
- (19) 註(14)に同じ
- (20) 註(17)に同じ
- (21) 梅原末治「栗太、野洲両郡に於ける二・三の古式墳墓の調査報告」(前掲)
- (22) 丸山竜平「野洲郡野洲町富波遺跡発掘調査報告書」(『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』、滋賀県教育委員会、1975年)
- (23) 丸山竜平「古墳と古墳群(中)」(『日本史論叢』第7輯、1977年)
- (24) 梅原末治「近江国野洲郡小篠原大岩山の古墳調査報告」(『考古学雑誌』12-1、1921年)
- (25) 註(6)に同じ
- (26) 丸山竜平、前掲論文
- (27) 丸山竜平、前掲論文
- (28) 丸山竜平、前掲論文
- (29) 大手前女子大学考古研究会『円山古墳』(野洲町教育委員会、1983年)
- (30) 山尾幸久『日本古代王権形成史論』(岩波書店、1983年)
- (31) 山尾幸久「古代の野洲」(『野洲町史』第1巻、前掲)
- (32) 佐伯有清『新撰姓氏録の研究』考証篇第五(吉川弘文館、1983年)
- (33) 門脇禎二『采女』(中央公論社、1965年)
- (34) 広虫は、聖武天皇、光明皇后に重用されたことが推測される。
- (35) 磯野浩光「近江の『山君』について」(『史想』20、1984年)
- (36) 岡本明郎「山部と製鉄」(『古代の日本』4、中国四国、角川書店、1970)
- (37) 丸山竜平「近江製鉄史序論」(『日本史論叢』第8輯、1980年)
- (38) 大橋信弥「久米部の歌舞について」(『日本史研究』157、1975年)
- (39) 上田正昭「日本武尊」(吉川弘文館、1960年)
- (40) 山尾幸久「古代の野洲」(前掲)
- (41) 水野正好「滋賀郡所住の漢人系帰化氏族とその墓制」(『滋賀県文化財調査報告書』第4冊、滋賀県教育委員会、1969年)
- (42) 山尾幸久「近江大津宮をめぐる二、三の問題」(『近江、大津宮の検討』、古代を考える49、1989年)
- (43) 篠川賢『国造制の成立と展開』(吉川弘文館、1985年)

- (44) 井上光貞「国造制の成立」(『史学雑誌』60-2、1951年)、八木充「古代地方組織發展の一考察」(『史林』41-5、1958年)
- (45) 山尾幸久「古代の野洲」(前掲)
- (46) 大橋信弥『日本古代国家の成立と息長氏』(吉川弘文館、1984年)

## 編集後記

本号には8編の論考を掲載することができました。職員の頑張りに頭が下がる思いです。ただ、少し気になることは、既刊寄稿者が多いということです。次号への課題といたしたいと思います。

翌年度は協会設立20周年。さらなる充実を期し、思いを新たにして出発いたします。今後ともご協力のほど、宜しくお願いします。  
(普及啓発事業担当)

平成2年3月

### 紀 要 第 3 号

編集・発行 財団法人滋賀県文化財保護協会  
大津市瀬田南大菴町1732-2  
TEL(0775)48-9780・9781

印 刷 大津紙業写真印刷株式会社  
大津市月輪三丁目9-33  
TEL(0775)44-0190(代)